

## 開催挨拶

— 宮川秀樹 (JICA森林・自然環境協力部 部長) —

○司会 (小野) それでは、定刻になりましたので、皆様、ご着席願います。改めまして、本日はご多忙の中、多数の皆様にお集まりいただきましてまことにありがとうございます。ただいまから環境コミュニケーション公開フォーラムを開催いたします。

司会を務めさせていただきますのは、私、国際協力事業団森林・自然環境協力部の小野でございます。最後までどうぞよろしく願いいたします。

本日のシンポジウムは、お手元の議事次第にありますとおり、休憩を挟んだ2部構成となっています。第1部では、環境コミュニケーションにかかわるJICAの取り組みの概況、環境コミュニケーションにかかわるプロジェクトからの事例紹介。第2部では、環境保全への意識、また活動推進と持続をテーマとしてパネリストの方々に討論していただくとともに、参加いただいたフロアの方々のご意見、ご助言をいただき、環境コミュニケーションによるより良い国際協力のあり方を考えていきたいと存じます。

初めに、国際協力事業団を代表いたしまして、森林・自然環境協力部部長宮川秀樹よりごあいさつを申し上げます。

○宮川 (JICA) 本日は環境コミュニケーション公開フォーラムを開催しましたところ、年度末の大変お忙しい中、大勢の皆様方にご参加いただきました。大変ありがとうございます。また、日ごろからJICAの自然環境協力を多大なご支援、ご協力をいただいております。あわせて心より感謝申し上げます。

さて、JICA森林・自然環境協力部では、このような公開フォーラム、あるいは公開シンポジウムを毎年数回開催しております。これは、JICAが実施いたします国際協力につきまして、広く国民の皆様方に知っていただくことを、その主な目的としております。また、参加者の方々からコメントやご提案をいただきまして、それを参考にさせていただいています。そして、将来のより良い国際協力を資するためなどの目的も持って開催しているわけでございます。

本日は、「環境保全のためのコミュニケーション」というテーマで、皆様方と意見交換をしたいと考えています。より良い環境保全のためには多くの関係者、つまり地域住民、行政機関、大学、研究機関、マスメディア、そして一般国民によります積極的な取り組みが必要不可欠となっています。開発途上国の関係者が環境保全に対する意識を高め、環境保全に関する知識や技術の習得を行い、そして具体的な環境保全活動を積極的に展開していくこと、これらが極めて重要です。

しかしながら、これらの取り組みを円滑に、かつ効果的に行うことは決して容易ではありません。その要因といたしましては、自然環境の保全と利用について関係者間での利害が必ずしも一致していないこと

が挙げられます。つまり、あるグループにとって利益となる活動が、他のグループにとっては損失となるかもしれない。そういうことがしばしば起こり得るわけです。また、環境保全と利用に関しまして、意思決定のプロセスが明確になっていないことなどが指摘されています。これらの問題は、すべて関係者間でのコミュニケーションが十分にとれていないことに起因しています。従いまして、効果的な環境保全のための活動の1つのキーワードは、円滑なコミュニケーションであるということが言えると思います。関係者間での円滑なコミュニケーションが何より大切です。

近年、環境教育、エコツーリズム、社会林業など自然環境の保全と持続的利用に関するさまざまな活動が注目を集めています。これらの活動は関係者間のコミュニケーションが軸となって進められるものですが、コミュニケーションの方法としては、普及・啓蒙活動、マスメディアの活用、環境キャンペーン等さまざまです。しかし、円滑で効果的なコミュニケーションは、関係者相互の信頼があって初めて成り立つものです。

JICAは、今後とも多くの方々とのコミュニケーションを大切にしていきたいと考えています。コミュニケーションという側面から、皆様方と一緒に環境保全について考えてみたいと思っています。

本日は、環境保全の活動事例といたしまして、ネパール、インドネシア、インドの3つのプロジェクトの紹介がございます。その後、環境保全について5名のパネリストによりパネルディスカッションを予定しています。また、質疑応答の時間をとっていますので、どうか会場の皆様方からの積極的な活発なご意見、ご質問を期待しています。

本日の公開フォーラムが皆様方の積極的なご参加により有意義なものとなりますよう、ご協力をお願いいたしまして、ごあいさついたします。ご静聴ありがとうございました。（拍手）

## J I C Aの取り組み説明

### 一 三国成晃 (JICA森林・自然環境協力部 計画課 課長代理) 一

○司会 最初に、環境コミュニケーションについて、これまでのJ I C Aの取り組みの概況について、国際協力事業団森林・自然環境協力部計画課課長代理三国成晃よりご説明申し上げます。

○三国 (J I C A) 皆様こんにちは。森林・自然環境協力部計画課の三国と申します。10分程度お時間をいただきまして、J I C Aの取り組みについて簡単にご説明させていただきたいと思います。

言うまでもなく、我々J I C Aの森林・自然環境協力部にとっては、自然環境保全の協力をいかに効果的、効率的に行うのか、行えるのかというのが最大の関心事です。いろいろポイントがあると思います。例えば啓蒙、普及、訓練、情報公開、教育、対話、このようないろいろなポイントがあるわけです。こういうポイントを眺めて、コミュニケーションというものでくくれるのではないかと考えてみました。

コミュニケーションという切り口が環境保全に対して有効なツールになり得るのではないか。ここにもありますように、環境保全あるいは環境的に持続可能な社会の構築のための有効なツールとして位置づけられるのではないか。知識をつける、その知識が態度としてあらわれる、そして実行、さらにその実行が継続する、このような一連の行動変化を支援、促進するツールとしてコミュニケーションは位置づけられるのではないかと考えてみました。

我々は幾つか自然環境保全の協力を行っています。その問題点を分析してみますと、まず意識の問題、これが非常に大きいのではないかと思います。「なぜ環境保全の意識が低いのか」。こういう大上段に書いてしまいますと、果たして私自身は意識が高いのかという質問が返ってきそうです。その辺を議論すると少し議論が複雑になってしまいますので、先進国とかドナー側の意識はとりあえず置いておいて、途上国、我々の援助対象国についてだけに絞って考えてみます。環境の価値について十分認識がされていないのではないか。さらに、環境の重要性は知っていても、食べる方が重要でそれどころではない。石油のCMにもありましたけど、食べるのに困っている人に木を伐るなどと言っても、それは伝わらない、まさにそういうことだと思います。こういう問題に対してJ I C Aとしてどういうアプローチ、プロジェクトが考えられるか。1つは、環境の価値を伝えるためにマスメディアを使ったり、セミナーを開催したり、もしくは学校教育のカリキュラムに環境教育を取り入れる、ということプロジェクトとして推進しています。

意識の問題の次に、やはり活動の持続という問題があると思います。たとえ環境が大事だなということに気がついた、認識されたとしても、実際、お金もないですし、技術もない。また人材、政府の政策、そういうような問題・制約のために、実際の活動に結びつかない。また、J I C Aの協力等でとりあえず活動が開始したとしても、J I C Aの協力が終わった後、持続はなかなか難しい。資金援助、技術協力、日

本のODAでいろいろな手は打っていますが、持続的な成果にはなかなか結びついてないというのが現状ではないかと思えます。

今の問題認識に立ちまして整理をしてみます。それが今日のテーマにもつながってきます。まず、どうすれば意識が醸成されるのか、さらに、それがどうすれば態度変化につながり、行動変化になり、そして活動が持続されるのか。そういうところを今日皆様と一緒に考えまして、今後のJICAの協力の参考にさせていただければと思います。

今日の公開フォーラムに先立ちまして、我々JICA森林・自然環境協力部の方でも、内部の非公式な勉強会、検討会を何回か開催しました。まだ整理はされていないのですが、そういう検討会、勉強会で出たキーワードだけ、今日の議論のきっかけにもなるかと思えますのでご紹介いたします（注：6ページからのパワーポイント発表資料参照）。

まず、途上国、受け手側の社会・文化を重視する必要があるだろう。我々JICA、外部の人間が入って行って押しつけても、コミュニケーションとしては成立しないのではないかと。さらに、コミュニケーションの契機となるのは感動。相手側のコミュニケーションしたいというインセンティブというか、動機づけが重要です。その動機は感動から生まれてくるのではないかと。ここに科学的な翻訳とありますが、途上国の人たちがふだん何気なく見ているものでも、それはグローバルな世界では、または自然環境の科学的な位置づけでは、こういう重要なものを紹介してあげると、それによって感動が生まれて、意識が芽生えてくるのではないかと。次の環境教育、これはドナーがするものではなくて、むしろ住民から受けるものではないかと。どんな社会でも、多分環境を大事にしようという思想というか、伝統というか、必ず根はあるわけで、その根をうまく掘り起こして育てていく、そういうアプローチが重要なのではないかと。要するに、あなたたちが今まで伝統的にやってきた中にも環境を大切にしている、そういう意識、そういう行動はあるはずで、それを発展させてください。そういうアプローチが効果的なのではないかと思えます。

もう1つは、やはり食べる方が問題なので、環境を保全するとともに、どういう便益が生まれるのか。市場経済ですので、マーケットを見つけてあげる。例えばイヌワシ。これはモンゴルにイヌワシがいて、そのイヌワシの羽を日本に持ってくると茶道の道具の材料として売れるらしいのです。そういうマーケットを見つけて、保護と生計向上が両立するような道筋を示してあげる。ただ、これは非常にリスクもありまして、一旦イヌワシの羽が売れるとなったら、みんなイヌワシを捕まえだしたりすると本末転倒になります。安易な代替収入源の提案は気をつけるべきです。特に今、エコツーリズムが非常に注目されていますけど、これも万能ではないということがあります。

ここで言っている環境保全というのは、文化、科学、社会、経済、財政、ちよつとこうやって挙げていますけれども、かなりいろんな側面が連立多元方程式みたいな形で組み合わされていて、その解を見つけ

ていくという非常に難しい仕事と改めて認識しています。

JICAとして、今後どうやっていくのだというのは、まだここでは明確に見えていません。今日の皆様との間で行われる活発な議論を通して、また我々もこれからいろいろ勉強もして、そういう努力を続けながら、より良い環境協力、しかも、環境コミュニケーションに注目して事業を進めていきたいと思えます。

これは、JICAにコピーライトがあるわけではありませんが、「e-communication for e-cooperation」いいコミュニケーションでいい国際協力を目指します。こういうキャッチフレーズでやっていこうと思えますので、今後ともご支援よろしくをお願いします。（拍手）

○司会 ありがとうございました。

「JICAの取り組み説明」  
(三国成晃/JICA森林・自然環境部計画課課長代理)

環境コミュニケーション公開フォーラム

国際協力事業団  
森林・自然環境協力部

環境コミュニケーションとは？

◆円滑に効果的に環境保全を行うには？

◆啓蒙が重要 ◆情報公開が重要  
◆普及が重要 ◆教育が重要  
◆訓練が重要 ◆対話が重要

コミュニケーションが重要！

環境コミュニケーションとは？

- 環境保全あるいは環境的に持続可能な社会の構築のための有効なツール
- 「知識をつける→態度として表れる→実行する→実行が継続する」という一連の「行動変化」を支援、促進するもの

分析1：  
なぜ環境保全の意識が低いのか？

環境の価値を知らない。(教育機会の不足)

環境保全の重要性は知っているけど、食べる方が重要。

等々

環境の価値を伝える。  
(マスメディア、セミナー、学校教育 等々)

環境的に持続可能な開発の推進。

分析2：  
なぜ環境保全の活動が持続しないのか？

資金がない。技術がない。人がいない。政策がない。

等々

資金援助？ 技術協力？

どうやって？

本日の議事

どうすれば環境保全への意識が醸成されるか？

どうすれば態度に変化がみられるようになるか？

どうすれば行動変化が促進出来るか？

どうすれば環境保全の活動が持続するか？

3つの事例とパネルディスカッション

### JICA での検討状況：教訓 1

社会の文化を重視する。(地域住民の考えを尊重)

外部の人(援助関係者)は押し付けてはいけない。

地域社会の文化を科学的に翻訳することが大切。

環境教育はするものではない。住民から受けるもの。

「これは今まであなた方がやってきたことでしょ？」

### JICA での検討状況：教訓 2

経済的なインセンティブの付与

市場を見つける。

例：イヌワシの羽が茶道で使われる。

安易に代替収入源を提案しない。

エコツーリズムは万能ではない。

**保全=文化+科学+社会+経済+財政**

e-communication  
for  
e-cooperation

いいコミュニケーションでいい  
国際協力を目指します！